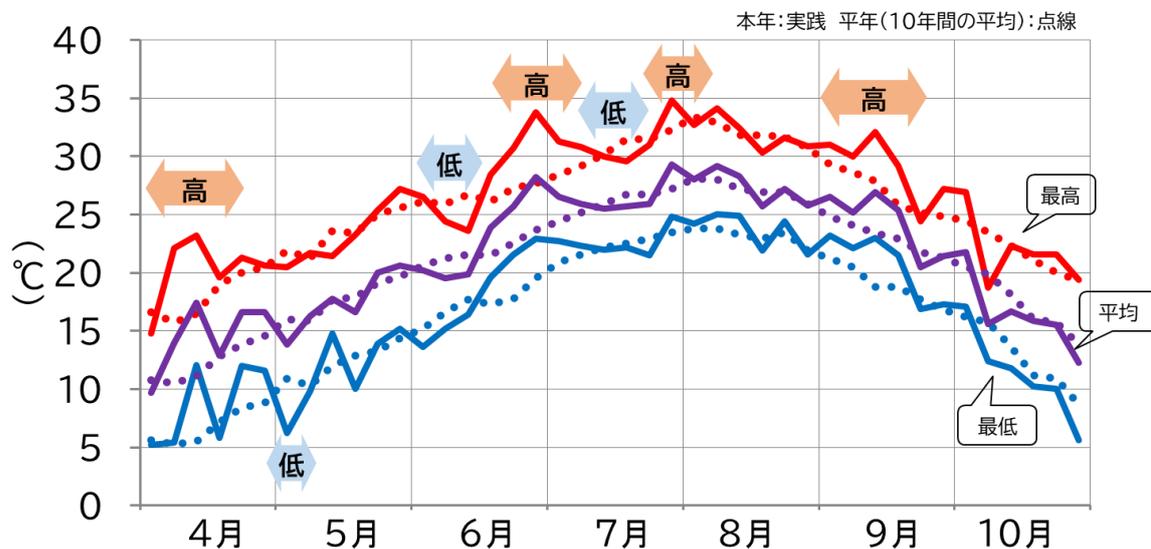


令和4年産（2022年産）の稲作概要

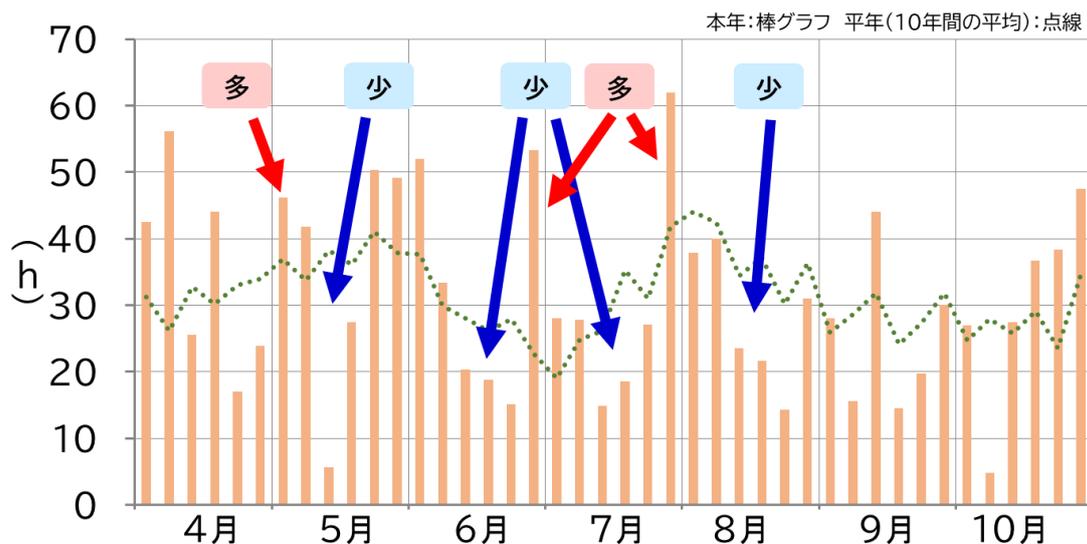
湖北農業農村振興事務所農産普及課

1. 気象概要（彦根气象台 虎姫アメダスデータを基に作成）

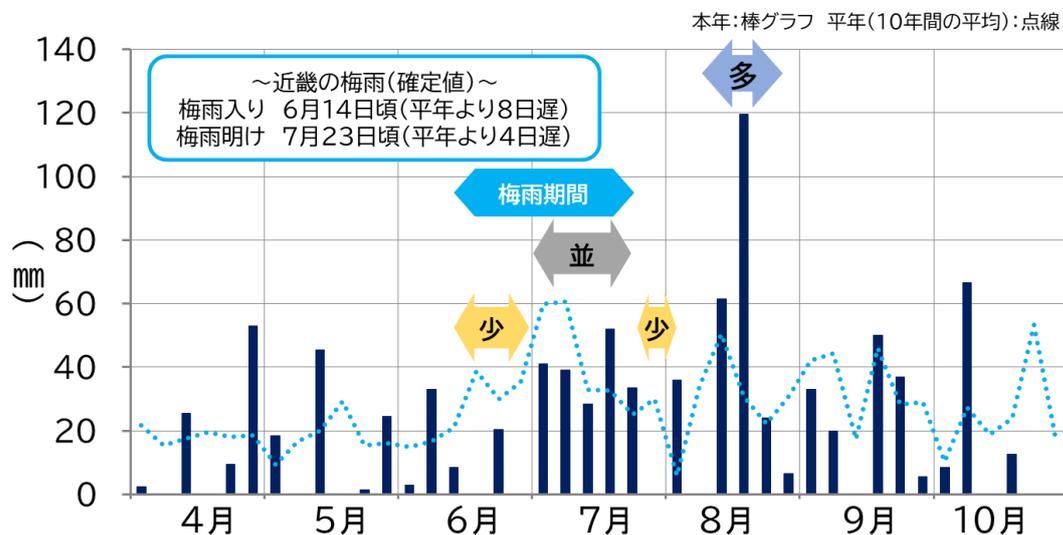
気温



日照時間



降水量



2. 生育の概要

生育ステージ	概 要
育苗期	4月2日の最低気温が0℃を下回り、長浜市北部では一部で低温による生育抑制が発生した。その後、4月中旬までは一転して高温となり、苗の徒長やピシウム属菌による苗立枯病、もみ枯細菌病の発生が見られた。4月中旬以降は平年並かやや高温で推移し、概ね生育は順調に進んだ。
移植期～ 分けつ期 (前半)	連休後半移植では、低温や強風による植え傷みが生じた。5月は全般的に晴れの日が多かったが、気温の変動が大きく、植え傷みからの回復が遅れ、分けつの発生はやや遅れた。 5月中旬移植では、初期生育は順調に進み、連休移植のほ場との生育差が小さくなった。 一部のほ場で藻類が多発生し、分けつを抑制した。
分けつ期 (後半) ～幼穂形成期 ～出穂期	6月前半は数日低温の日があったものの、6月後半は気温が平年よりかなり高くなり、分けつが促進され、草丈が伸長した。遅れていた連休移植でも生育が進み、幼穂形成期は平年より早まった。 7月に入ると1週間おきにまとまった降雨があり、日照時間は短くなった。節間伸長期を迎えた品種では下位節間が伸長し、倒伏リスクが高まった。 葉いもちが広範囲で確認され、7月19日に穂いもちの注意報が発表された。 7月23日頃の梅雨明け以降は高温多照となり、出穂期は平年より早まった。 8月3～4日の豪雨や盆明けの大雨などの影響を受け、倒伏するほ場が多く見られた。また、8月上旬に出穂した中生品種や遅植えの「コシヒカリ」で穂いもちが発生した。
登熟期 ～収穫期	【連休移植（早生品種中心）】 出穂期前後に梅雨明けし、登熟期序盤は高温多照で経過したものの、中盤は日照時間が短く推移し登熟の進みが鈍化した。成熟期は平年より早まった。 収穫期まで断続的な降雨があり、収穫作業は遅延する傾向にあった。一方で、晴れ間を狙って作業を行ったことで、極端な早刈りになるほ場も見られた。 【5月中旬移植（早生品種、中生品種）】 登熟期序盤から日照時間は短い傾向であったが、8月末以降は平年並に回復した。成熟期は平年並であった。 9月全般が高温で推移したことにより、刈り遅れによる胴割粒の発生が多くなった。

3. 病害虫発生状況

(発生量は病害虫防除所の調査結果より)

葉いもち 【発生量】 多	6月中旬以降いもち病の感染好適日が断続的にあり、湖北地域でも広い範囲で葉いもちの発生を確認。 7月19日に注意報発表。病害虫防除所の調査によると7月中旬の県内における葉いもちの発生ほ場率は過去10年で最も高かった。
穂いもち 【発生量】 やや多	8月上旬以降に出穂した5月中旬移植の早生品種や中晩生品種を中心に、8月の天候不順の影響で穂いもちが発生。 昨年同様、中山間地域や一部の平坦地で特に発生が多かった。
紋枯病 【発生量】 並	発生時期は平年より遅かったが、7月以降の高温多雨傾向により症状が急激に進行した。 倒伏とともに多発生となったほ場が散見された。

斑点米かみシ類 【発生量】 やや多	各地で発生を確認。 7月21日に注意報発表。病害虫防除所の調査によると6月下旬までの高温で発生量はやや多くなり、出穂期以降に本田への飛び込みが増大した。
トビロウソウカ 【発生量】 並	中国から梅雨時期に下層ジェット気流によって飛来し、西日本を中心に被害が発生。 予察灯での県内初発確認は7月18日と平年より早く、県内4地点で1～2頭ずつ確認されたが、本県への多数の飛来はなかったものとみられ、坪枯れ症状の発生も確認していない。
コブノメイガ 【発生量】 やや少	中国からの飛来害虫。例年6月後半頃に飛来。葉を筒状に綴り食害する。 一昨年は発生が多かったが、今年はほとんど発生を確認していない。

4. 収量および品質

	概 要
収 量	<p>【作況指数】 湖北「101」（滋賀県「101」）※農林水産省近畿農政局11月9日公表 穂数、一穂籾数、㎡あたり籾数、登熟とも平年並</p> <p>【品種別の傾向】 早生品種（連休移植）平年並～やや多 （5月中旬移植）やや少～平年並 中生品種 平年並</p> <p>全般的に穂数、一穂籾数とも平年並であったが、7月の日照不足で節間が伸長し早期に倒伏した。 ほ場や、穂もちが多発したほ場では、登熟歩合が低下し収量が大幅に低下。 8月に出穂期を迎えた早生品種では、登熟期間が全般的に日照不足となり登熟歩合が低下し減収。</p>
品 質	<p>湖北地域の一等米比率（カッコ内は前年同期の値）※両JA検査分（10月25日時点） 「みずかがみ」93%（96%） 「コシヒカリ」75%（78%） 「日本晴」92%（93%）</p> <p>日照不足による整粒不足や白未熟粒が多くなった。特に、連休移植のコシヒカリなどでは、登熟前半の高温障害により白未熟粒の発生が多くなった。 カメムシ類の発生はやや多かったが、一等米比率の低下に大きく影響する被害にはならなかった。</p>

5. 次年度への対策

(1) 土づくり

- ・土づくり資材等の施用による地力維持。
- ・稲わら腐熟促進のため、水稻収穫後の早期秋耕の実施（還元障害対策としても有効）。

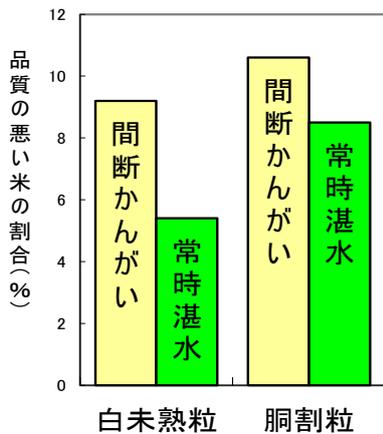
(2) 丁寧な水管理

- ・初期分けつの確保のため、苗活着後は浅水管理とする。
- ・還元障害がみられる場合、移植2週間後に自然減水で軽く干す。
- ・藻の発生が多い時には、水の入れ換えを行う。
- ・移植1か月で中干しを開始する。溝切りを行い、収穫直前まで入水できる地耐力を確保する。

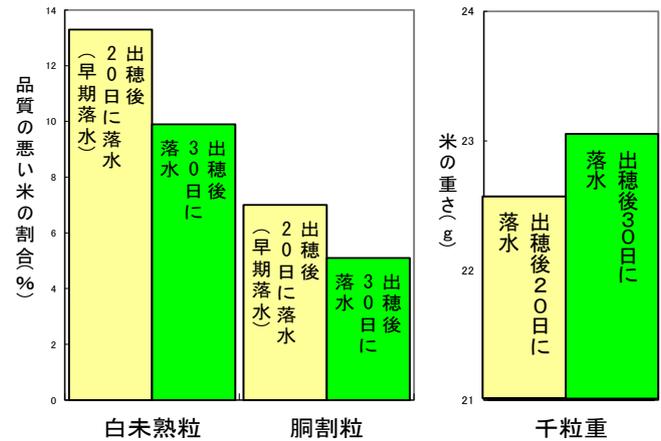


移植20日後の還元障害ほ場
分けつが確保されていない。

- ・出穂前後各3週間の湛水管理によりカドミウム吸収抑制対策、白未熟粒や胴割粒の発生を抑制する効果あり。
- ・早期落水を防止し、収穫作業に支障のない限り遅くまで入水する。



出穂前後の水管理と
白未熟粒・胴割粒の関係



落水時期と白未熟粒・胴割粒・千粒重の関係

(3) 生育に応じた施肥

- ・高温条件における穂肥の施用

稲体の栄養を維持し、白未熟粒などの外観品質の低下を防ぐため、葉色が薄い場合は追肥を施用。ただし、食味とのバランスに配慮が必要となるため以下の目安を参考にする。

施用時期： 出穂期から穂ぞろい期

施用量： 窒素成分で1～2kg/10a

(4) 病虫害防除

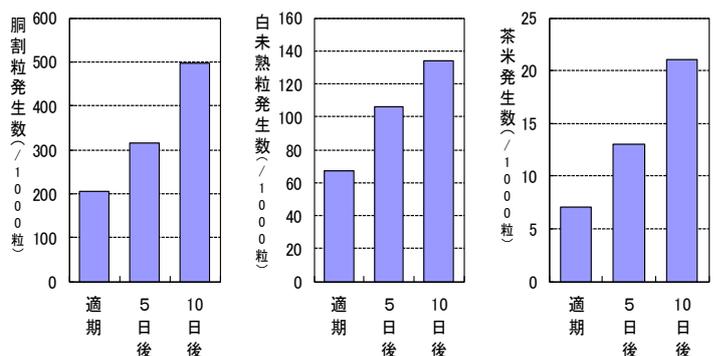
- ・**いもち病** (今年発生が多かった場合は要注意)
稲わらのすきこみ、箱粒剤施用 (播種時～移植時)、粒剤等による本田防除 (穂ばらみ期～出穂期)。
- ・**斑点米カメムシ類**
稲の出穂3週間前と出穂期の2回草刈りの実施。
出穂10日後頃 (粒剤は出穂7日後頃) の薬剤防除。
- ・**紋枯病** (今年発生が多かった場合は要注意)
プラウ等での反転耕により、菌核を埋没する。
箱粒剤を施用する (播種時～移植時)。
毎年発生が多い場合は、本田防除を実施。
過繁茂、分けつ過多にさせない。
- ・**トビイロウンカ**
飛来が多く、被害が見込まれる場合に防除 (飛来に関する情報に注意)。



刈取適期の穂
上から3～4本目の枝梗につく籽
が全て黄化した頃

(5) 適期収穫

- ・刈り遅れは品質低下を助長。
- ・収穫適期 (籽黄化率 85～90%) をほ場で確認。「みずかがみ」は90%を目安に。
- ・登熟日数は短い傾向、早めにコンバインや乾燥機等を準備する。



刈り遅れと品質の関係